

縷紅新草

泉鏡花作

一

あれ／＼見たか、

あれ見たか。

二つ蜻蛉が草の葉に、

かやつり草に宿をかり、

人目しのぶと思へども、

羽はうすものかくされぬ、

すきや明石に緋ぢりめん、

肌のしろさも淺ましや、

白い絹地の赤蜻蛉。

雪にもみぢとあざむけど、

世間稻妻、目が光る。

あれ／＼見たか、

あれ見たか。

「をぢさん——其の提灯……」

「あゝ、提灯」

唯今、午後二時半ごろ。

「私が持ちませう、磴に打撞りますわ。」

一肩の上に立った、其の肩も裳も、嫺な三十ばかりの女房が、白い手を差向けた。

お米といつて、これは其のをぢさん、辻町糸七

ーの従姉で、一昨年世を去つたお京の娘で、

土地に老舗の塗師屋なにがしの妻女である。

撫でつけの水々しく利いた、おとなしい、静な圓

鬘で、頸脚がすすきりして居る。雪國の冬だけれど

も、天氣は好し、小春日和だから、コオトも着ない

で、着衣のお召で包むも惜しい、色の清く白いのが、

片手に、お京ーその母の墓へ手向ける、小菊

の黄菊と白菊と、あれは佗しくて、こち／＼と寂し

いが、土地がら、今時は、お定りの俗に稱ふる坊さ

ん花、薊の軟いやうな樺紫の小鶏頭を、一束にして

添へたのと、一寸色紙の二本たばねの線香、一錢蠟

燭を添へて持った、片手を伸べて、「その提灯

を」といつたのである。

山門を仰いで見る、處々、壊え崩れて、草も尾花  
もむら生えの高い磴を登りかゝつた、お米の實家の  
檀那寺　――　仙晶寺といふのである。が、燈籠寺  
といつた方が此の大城下によく通る。

去ぬる・・・いや／＼、いつの年も、盂蘭盆  
に墓地へ燈籠を供へて、心ばかり小さな燈を灯すの  
は、此のあたり凡てかはりなく、親類一門、それ／＼  
知己の新佛へ　志のやりとりをするから、十三日、  
迎火を焚く夜からは、寺々の卵塔は申すまでもない、  
野に山に、標石、奥津城のある處、昔を今に思ひ出  
したやうな無縁墓、古塚までも、かすかな顯つぽい  
苔の花が、ちら／＼と切燈籠に咲いて、地の下の、  
灰白い寂しい亡靈の道が、草がくれ木の葉がくれに、  
暗夜には著く、月には幽けく、冥々として顯はれる。  
中でも裏山の峰に近い、此の寺の墓場の丘の頂に、  
一樹、榎の大木が聳えて、その梢に掛ける高燈籠が、  
市街の廣場、辻、小路。池、沼のほとり、大川縁。  
一里西に遠い荒海の上からも、望めば、仰げば、佇  
めば、みな空に、面影に立つて見えるので、名に呼  
んで知られて居る。

この燈籠寺に對して、辻町糸七の外套の袖から半  
間な面を出した晝間の提灯は、松風に颯と誘はれて、  
いま二葉三葉散りかゝる、折からの緋葉も灯れず、  
ぽか／＼と暖い磴の小草の日だまりに、あだ白けて、  
のびれば欠伸、縮むと、嚏をしさうで可笑しい。  
辻町は、欠伸と嚏を緬へたやうな掛聲で、  
「あゝ、提灯。いや、どっこい。」と一段踏む。

「いや、どっこい。」

お米が莞爾、

「ほゝゝ、そんな掛聲が出るやうでは、をぢさ

ん。

「何、くたびれやしない。くたびれたといったつ  
て、こんな、提灯の一つぐらゐ。．．．尤も持  
重りがしたり、邪魔になるやうなら、一寸、こゝい  
らの薄の穂へ引掛けて置いても差支へはないんだが  
ね。」

「それはね、誰も居ない、人通りの少い處だし、  
お寺ですもの。そこに置いといたつて、人が何うも  
しはしませんけれど。．．．持ちませうといふ  
のに持たさないで、をぢさん、自分の手で」

「自分の手で。」

「あんな、知らない顔をして、自分の手からお手向けなさりたいのでせう。こゝへ置いて行つては、

お志が通らないではありませんか、悪いわ。」

「お叱言で恐入るがね、自分から手向けるつて、一體誰だい。」

「それは誰方だか、ほゝゝ。」

また莞爾。

「せい／＼、そんな息をして……此處がいゝ、一寸お休みなさいよ、さあ。」

丁ど段々中繼の一土間、向棧敷と云つた處、さかりに緋葉した樹の根に寄つた方で、うつむき態に片袖をさしむけたのは、縫れ、手を取らう身構へで、腰を靡娜に振向いた。踏掛けて塗下駄に、模様の雪輪が冷くかゝつて、淡紅の長襦袢がはらりとこぼれる。

なまめか  
媚しさ、といふと雖も、お米はをぢさんの介添のみ、心にも留めなさうだが、人妻なれば憚られる。

其處で、件の晝提灯を持直すと、柄の方を向うへ出した。黒塗の柄を引取ったお米の手は、尚ほ白くて優しい。

憚られもしようもの。礎たるや、山賊の構へた巖の砦の火見の階子と云つてもいゝ、縦横町條の家毎の屋根、辻の柳、遠近の森に隠顯しても、十町三方、城下を往來の人々が目を欵れば皆見える、見た其の容子は、中空の手摺にかけた色小袖に外套の熊蝉が留つたに其のまゝだらう。

蝉はひとりでジジと笑つて、緋葉の影へ翩然と飛移つた。

いや、翩然となんぞ、そんな器用に行くものか。

「ありがたう・・・・・・提灯の柄のお力添に、片手を縫つて、一方に洋杖だ。こいつがまた素人が拾つた櫂のやうで、うまく調子が取れないで、だらしなく袖へ搔込んだ處は情ない、まるで兩杖の形だな。」

「いやですよ。」

「意氣地はない、が、止むを得ない。お言葉に従つて一休みして行かうか。丁どお詠へ、苔滑・・・と、ご苦勞を掛けた提灯を、これへ置くか。樹下石上といふと豪勢だが、恚うした處は、地藏盆に筵を敷いて鉦をカンくと敲く、はつち坊主其のまゝだね。」

「そんなに、せつかちに腰を掛けてさ、泥がつきますよ。」

「構はない。破れ麻だよ。たかが墨染にて候だよ。」

「墨染でも、喜撰でも、所作舞臺ではありません、よごれますわ。」

「どうも、これは。きれいな其の手巾で。」  
「散つて居るもみぢの方が、きれいです、拂つては澄まないやうな、こんな手巾。」

「何色といふんだい。お志で、石へ月影まで映して来た。あゝ、いゝ景色だ。いつも此處は、といふうちにも、今日はまた格別です。あひかはらず、海も見える、城も見える。」

といつた。

就中、公孫樹は黄也、紅樹、青林、見渡す森は、  
みな錦葉を含み、散残つた柳の緑を、うすく沙に綾  
取つた中に、層々たる城の天守が、遠山の雪の巔を  
抽いて聳える。そこから斜に濃い藍の一線を曳いて、  
青い空と一刷に同じ色を連ねたのは、いふ迄もなく  
田野と市街と城下を巻いた海である。荒海ながら、  
日和の穏かさに、渚の浪は白菊の花を敷流す・・・  
・此の友禪をうちかけて、雪國の町は薄霧を透し  
て青白い。その袖と思ふ一端に、周圍三里ときく湖  
は、晝の月の、半圓なるかと視められる。

「お米坊。」

をぢさんは、目を移して1

「景色もいゝが、容子がいゝな。―― 提灯屋

の親仁が見惚れたのを知つてるかい。

（其の提灯を一つ、いくらです。） といつたら、

（何うぞ早や、お持ちなされまして・・・お

代はお次手の時、）・・・は何うだい。そのか

はり、遠國他郷のをぢさんに、賣りものを新聞づつ





う。第一そのために来たんぢやないか。」

「……それはご遠慮は申しませんの。母の許へお参りをして下さいますのは分つて居ますけれどもね、其のさきに——誰かさん——」

「誰かさん、誰かさん……分らない。米ちやん、一體その誰かさんは？」

「母が、いつも然ういつて居ましたわ。をぢさんは、（極りわるがり屋）といふ（長い屋）さんだから。」

「どうせ、長屋住居だよ。」

「ごめんなさい、そんなんぢやありません。だからつても、何も私に——それとも、思ひ出さない、忘れたのなら、それはひどいわ、餘りだわ。誰かさんに、悪いわ、濟まないわ、薄情よ。」

「しばらく、しばらく、まあ、待つておくれ。これは思ひも寄らない。唐突の儀を承る。弱つたな、何だらう、といつちや尚ほ悪いかな、誰だらう。」

「眞個に忘れたんですか。それで可いんですか。嘘でせう。それだと餘りぢやありませんか。一層ち

やんと言ひますよ、私から。――然ういつても釣出しにかゝつて私の方が極りが悪いかも如れませんけれども。……をぢさん、をぢさんが、むかし心中をしようとした、婦人のかた。」

藪から棒をくらつて膨らんだ外套の、黒い胸を、辻町は手で壓へる眞似して、目をニると、

「もう堪忍してあげませう。餘り知らないふりをなさるから一寸驚かしてあげただけれど、それも、もうお分りになつたでせう。――いつかの、その時、花の盛の眞夜中に。――あの、お城の門のまはり、暗い堀の上を行つたり、來たり……」

お米の指が、行つたり來たり、ちら／＼と細く動く、その動くのが、魔法を使つたやうに、向う遙かな城の森の下ぐゞりに、小さな男が、とぼんと出て、羽織も着ない、しよぼけた形を顯はすとともに、手を拱き、首を垂れて、とぼ／＼と歩行くのが臍に見える。それ、糧に飢ゑて死なうとした。それが其

夜の辻町である。

同時に、もう一つ。寂しい、美しい女が、花の雲から下りたやうに、すつと翳つて、おなじ堀を垂々下りに、町へ續く長い坂を、胸を柔に袖を合せ、肩を細りと裙を浮かせて、宙に漾ふばかり。さし俯向いた頸のほんのり白い後姿で、捌く褸も揺ぐと見えない、もの靜かな品の好さで、夜はたゞ黒し、花明り、土の筏に流るゝやうに、満開の櫻の咲蔽ふ其の長坂を下りる姿が目映つた。

――指を包め、袖を引け、お米坊。頸の白さ、肩のしなやかさ、餘り其の姿に似てならない。――

今、目のあたり、坂を行く女は、あれは、二十ばかりにして、其の夜、（烏をいふ）千羽ヶ淵で自殺して了つたのである。身を投げたのは潔い。

卑怯な、未練な、おなじ處をとぼつた男の影は、のめ／＼と生きて、こゝに仙晶寺の磴の中途に、腰を掛けて居るのであつた。

「あゝ、まるで魔法にかゝつたやうだ。」

頬にあてて打傾いた掌を、辻町は冷く感じた。時に短く吸込んだ煙草の火が、チリゝと耳を掠めて、爪先の小石へ落ちた。

「また眞個夢がさめたやうだ。――其の時、夜あけ頃まで、堀の上をうるついで、いつ家へ歸つたか、草へもぐつたのか、蒲團を引被つたのか分らない。打ち二めされたやうになつて寝た耳へ、

――兄さん……兄さん――  
と、聞こえたのは、……お京さん。」

「返事をしませうか。」

「願はうかね。」

「はい、おほゝ。」

「申すまでもない、威勢のいゝ若い聲だ。然うだらう、お互に二十の歳です。――死んだ人は、たしか一つ上だつたやうに後で聞いて覚えて居る。前の晩は、雨氣を含んで、花あかりも朦朧と、霞に綿を敷いたやうだつた。格子戸外の其の元氣のいゝ

聲に、むつくり起きると、おつと來たりで、目は窪  
んでゐる。額をさきへ、門口へ突出すと、  
顔色の青さを■られさうな、からりとした春爛な朝  
景色さ。お京さんは、結ひたての銀杏返で、半襟の  
淺黄の冴えも、黒縹子の帶の艶も、霞を拂つてきつ  
ぱりと立つて居て、（兄さん身投げですよ、お城  
の堀で。）（嘘だよ、こゝに生きてるよ。）と、  
うつかり私が言つたんだから、お察しものです。す  
ぐ背後の土間ぢや七十を越した祖母さんが、お櫃の  
底の、こそげ粒で、茶粥とは行きません、みぞれ雜  
炊を煮てござる。前々年、家が焼けて、次の年、父  
親がなくなつて、まるで、掘立小屋だらう。住むに  
も、食ふにも　ー　昨夜は城のこゝかしこで、早  
い蛙がもう鳴いた、歌を唄つてる蟲けらが、凡そ羨  
しい、と言つた場合。祖母さんは耳が遠  
いから可かつたものの、（生きてるよ。）は何  
事です。（何を寝惚けて居るんです。確乎するん  
です。）其の頃の様子を察して居るから、お京さ  
ん　ー　まゝならない思遣りのじれつたさの疝癢  
筋で、ご存じの通り、一うちの眉を顰めながら、  
（・・・・町内ですよ、此處の。いま私、前を通

つて来たんだけれど、角の箔屋。――うちの  
人ぢやあない、世話になつて、はんけちの工場へ勤  
めて居た娘さんですとさ。ちやんと目をあいて・  
・あれ、あんなに人が立つて居る。うらゝか  
な朝だけれど、路が一條、胡粉で泥塗たやうに、ず  
つと白く、寂然として、家ならび、三町ばかり、手  
前どもとおなじ側です、けれども、何だか遠く離れ  
た海際まで、突抜けに成つたやうで、其處に立つて  
居る人ばかりが――身を投げたのは淵だといふ  
のに――打つて来る波を避けるやうに、むら  
／＼と動いて、地が其處ばかり、ぐつしより汐に濡  
れてゐるやうに見えた。

花はちら／＼と目の前へ散つて来る。

私の小屋と眞向の・・・金持は焼けない  
ね・・・しもた屋の後妻で、町中の意地悪が

――今時はもう影もないが、――それ其の時  
飛んで来た、燕の羽の形に後を刎ねた、橋鬚とかい  
ふのを小さくのつけたのが、門の敷石に出て来て立  
つて、おなじやうに箔屋の前を熟とすかして視て居  
た。其の繼娘は、優しい、うつくしい、上品な人だ

つたが、二十にもならない先に、雪の消えるやうに  
白梅一所に水で散つた。いぢめ殺したんだ、あの繼  
母がと、町内で沙汰をした。其の色の浅黒い後妻の  
眉と鼻が、箔屋を見込んだ横顔で、お米さんの前髪  
にくつつき合つた、と私の目に見えた時さ。（い  
としゃ。）と其の後妻が、（なう、ご親類の、  
ご新姐さん。）—— 悉しくはなくても、向う前  
だから、様子は知つてる、行來、出入りに、顔見知  
りだから、聲を掛けて、（いつ見ても、好容色な  
や、はゝゝ。）と空笑ひをやつたとお思ひ、  
（非業の死とはいふけれど、根は身の行ひでござり  
ますなう。）とじろりと二人を見ると、お京さん、  
御母堂だよ、いゝかい。怪我にも眞似なんかさん  
なよ。即時、好容色な頤を打つけるやうにしゃくつ  
て、（はい、さやうでござります、なう。）と  
云ふが疾いか、背中の子。」

辻町は、時に、まつげの深いお米と顔を見合せた。

「その日は當寺へお参りに來がけだつたので  
ね、・・・お京さん、磴が高いから半纏おんぶ



でなしに、淺黄鹿の子の紐でおぶつて居た。背中へ、べつかつこで、（ばあ。）といふと、カタノと薄齒の音を立てて家中へ入つたらう。私が後妻に赤くなつた。

負つて居たのが、何を隠さう、こゝに好容色で立つて居る、さて、久しぶりでお目にかゝります。お前さんだ、お米坊——二歳、いや、三つだつたか。かぞへ年。」

「かぞへ年……」

「あゝ、然うか。」

「をぢさんの家の焼けた年、お産間近に、お母さんが、あの、火事場へ飛出したもんですから、その所爲ですつて……私には痣が。」 睫毛がふるふる。辻町は、ハツとしたやうに、ふと肩をすくめた。

「あら、うつかり、をぢさんだと思つて、ついで……。眞赤でしたわ、おとなになつて今ぢや薄りとたゞ青いだけです。」

をぢさんは目を俯せながら、故と見まもつたやうに慙ういつた。

「見えやしない、何にもないぢやないか、何處なのだね。」

「知らない。」

「まあさ。」

「乳の少し傍のところ。」

「きれいだな、眉毛を一つ剃った痕か、雪間の若菜・・・・・とも言うて居ないとー父がなくなつて歸つたけれど、私が一度無理に東京へ出て居た留守です。私の家のために、お京さんに火事場を踏ませて申譯がないよ。ー處で、その嬰兒が、今お見受け申すお姿となつたから、もうかれこれ三十年。・・・・・だもの、記憶も何も朧々とした中に、其の悲しいつくしい人の姿に薄明りがさして見える。遠くなつたり、近くなつたり、途中で消えたり、目先へ出たりー此方も、とぼ／＼と死場所を探して居たんだから、どうも人目が邪魔になる。さきでも目障りになつたらう。やがて夜中の三時過ぎ、天守下の坂は長いからね、坂の途中で見失つたが、見失つた時の後姿を一番はつきりと覚えて居る。だから、其の人が淵で死んだとすると、

一旦町へ下りて、もう一度、坂を引返した事になるんだね。

たゞし、然ういつた處で、あくる朝、町内の箔屋へ引取つた身投げの娘が、果して昨夜私が見た人と同じだか何うだか、實の處は分りません・・・それは今でも分りはしない。堀端では、前後一度だつて、横顔の鼻筋だつて、見えないばかりか、解りもしない。が、朝、お京さんに聞いたばかりで、すぐ、あゝ、其だと思つたのも、おなじ死ぬ氣の、氣で感じたのであらうと思ふ・・・と、お京さんが、むかうの後妻の目をそらして、格子を入つた。おぶさつたお前さんが、それ、今のべつかつこで、妙な顔・・・」

「えゝ、ほゝゝ。」  
とお米は軽く咲容して、片袖を胸へあてる。

「お京さん、いきなり内の祖母さんの背中を一つトンと敲いたと思ふと、鐵鍋の蓋を取つて覗いたつげ、勢のよくない湯氣が上る。」

お米は軽く鬢を撫でた。

「ちよろ／＼と燃えてる、竈の薪木、其の火だがね、何だか身を投げた女をあぶつて暖めて居るやうな気がして、消えきえに其處へ、袖褌を縫れて倒れた、ぐつしより濡れた髪と、眞白な顔が見えて、まるで其がね、向う門に立つて居る後妻に、はかない戀をせかれて、五年前に、おなじ淵に身を投げた、優しい姉さんのやうにも思はれた。餘程どうかして居たんだね。

半壊れの車井戸が、すぐ傍で、底の方に、ぱたんと寂しい雫の音。

ざら／＼と水が響くと、

――身投げだ――  
――別嬪だ――  
――身投げだ――

と戸外を喚いて人が駆けた。

この騒ぎは　――　さあ、それから多日、四方、隣國、八方へ、大波を打つたらうが、  
――　三年の間、かたい憤み　――

だつてね、お京さんが、その女の事については、當分、口へ出してうはささへしなれば、また私にも、話さへさせなかつたよ。

――　おなじ櫻に風だもの、兄さんを誘ひに來ると悪いから　――

其の晩、おなじ千羽ヶ淵へ、ずぶ／＼の黥間だつたのに、懨死にはぐれると、今さら氣味が悪くなつて、町をうるつくにも、山の手の辻へ廻つて、箔屋の前は通らなかつた。・・・

此の土地の新聞一種、買つては讀めない境遇だつたし、新聞社の掲示板の前へ立つにも、土地は狭い、人目に立つ、死出三途ともいふ處を、一所に彷徨つた身體だけに、自分から氣が怯けて、避けるやうに、避けるやうに、世間のうはさに遠ざかつたから、花

の散つたのは、雨か、嵐か、人に礫を打たれたか、  
邪慳に枝を折られたか。今もつて、取留めた、悉し  
い事は知らないんだが、それも、もう三十年。

・・・お米さん、私は、おなじ其の年の八月  
ー ー こゝいらはまだ、月おくれだね、盂蘭盆が  
過ぎてから、いつも大好きな赤蜻蛉の飛ぶ時分、道  
があいて、東京へ立てたんだが。 ー

ー あゝ、然うか。ー  
辻町は、息を入れると、石に腰をずらして、ハタ  
と軽く膝をたゝいた。

その時、外套の袖にコトンと動いた、石の上の提灯の面は、又をかしい。いや、をかしくない、大空の雲を淡く透して蒼白い。

「……さて、此だが、手向けるとか、供へるとか、お米坊のいふ——誰かさんは——」

「え、然うなの。」

と、小菊と坊さん花を一寸圍つて、お米は靜に頷いた。

「その嬰兒が、串戯にも、心中の仕損ひなどといふ。——いづれ、あの、いけずな御母堂から、いつかその前後の事を聞かされて、それで知つて居るんだね。」

不思議な、怪しい、縁だなあ。——花あかりに、消えて行つた可哀相な人の墓はいかにも、此の燈籠寺にあるんだよ。

若氣のいたり。……」

辻町は、額をおさへて、提灯に俯向いて、  
「何と思つたか、東京へ—— 出發間際、人目を忍んで……といふと悪く色氣があります。何、こそ／＼と、鼠あるきに、行燈形の小さな切籠燈の、就中、安價なのを一枚細腕で引いて、梯子段の片暗がりをお忍ぶやうに、此の磴を隅の方から上つて來た。胸も、息も、どきくしながら。」

ゆかたゞか、羅だか、女郎花、桔梗、萩、それとも薄か、淡彩色の燈籠より、美しく寂しからう、白露に雪をしさうな、その女の姿に供へる氣です。  
中段さ、丁ど今居る。

然るに、何うだい。お米坊は洒落にも私を、薄情だといふけれど、人間の薄情より三十年の月日は情がない。此の提灯でいふのぢやないが、燈臺下暗しで、とぼんとして氣がつかなくかつた。申譯より、面目がないくらゐだ。

—— すまして饒舌つて可いか知らん、その時は、此のもみぢが、青葉で眞黒だつた下へ來て、上へ墓



地を見るとき、向うの峯をぼつと、霧にして、木曾のはゝき木だね、こゝぢや、見えない。が、有名な高燈籠が榎の梢に灯れて居る。・ ・ ・葉と葉をくゞつて、燈の影が露を誘つて、ちら／＼と樹を傳ふのが、長くかゝつて、幻の藤の總を、すつと靡かしたやうに仰がれる。繪の模様は見えないが、まるで、其の高燈籠の宙の袖を、其の人の姿のやうに思つて、うつかりとして立つた。

―― あゝ、呆れた　――

目の前に、白いものと思つたつけ、山門を眞下りに、藍がかった浴衣に、晝夜帯の婦人が、  
―― 身投げに逢ひに來ましたね　――

言ふ事も言ふ事さ、誰だと思ひます。御母堂さ。それなら、言ひさうな事だらう。いきなり、ぐわんと撲はされたから、をぢさんの小僧、目をまるくして膽を潰した。然うだらう、當の御親類の墓地へ、といつては、つひぞ、つけとゞけ、盆のお義理なんぞに出向いた事のない奴が、

辻町は提灯を押へながら、

「酒買ひ狸が途惑をしたやうに、燈籠をふら下げ  
て立つて居るんだ。」

いふ事が捷早いよ、お京さん、然う、のつけにや  
られたんぢや、事實、親類へ供へに來たものにした  
處で、然うとはいへない。

—— 初路さんのお墓は —— 如何にも、  
若い、優しい、が、何だか、弱々とした、身を投げ  
た女の名だけは、いつか聞いて居た。

—— お墓の場所は知つて居ますか ——  
知るもんですか。お京さんが、崖で夜露に、  
處へ、石ころ道が切立てで危いから、そんなにとぼ  
ついで居るんぢや怪我をする。お寺へ預けて、晝間  
あらためて、お参りを、然うなさい、といふ。此方  
はだね。日中のこゝ、出られますか。何、志はそれ  
で濟むから此の石の上へ置いたなり歸らうと、降参  
に及ぶとね、犬猫が踏んでも、きれいなお精靈が身  
震ひをするだらう。 —— とに角、お寺まで、と  
云つて、お京さん、今度は片褌をきりりと端折つた。

此方も其の要心から、故と夜になつて出掛けたのに、今頃まで、何をして居たらう。(遊んで居た世の中の煩さゝがなくて寺は涼しい。裏縁に引いた山清水に……西瓜は驕りだ、和尚さん、小僧には内證らしく冷して置いた、紫陽花の影の映る、青い心太をつる／＼突出して、芥子を利かして、冷い涙を流しながら、見た處三百ばかりの墓燈籠と、草葉の影に九十九ばかり、お精靈の幻を見て涼んで居た、その中に初路さんの姿も。) と、お京さん、好きなお轉婆をいつて、山門を入つた勢だからね。……その勢だから……向つた本堂の横式臺、あの高い處に、晩出の參詣を待つて、お納所が、盆禮、お返しおのしるしと、紅白の麻絲を三寶に積んで、小机を控へた前へ。どうです、私が引込むもんだから、お京さん、引取つた切籠燈をツイと出すと、

――此の春、身を投げた、お嬢さんに……  
……心中を仕掛つた、此の人の、こゝろざし――  
私は門まで遁出したよ。あとをカタ／＼と追つて

返して、

――それ、紅い絲を持つて來た。縁結びに

「ー 白しろいのが好よかつたか知ら、・・・あひ  
ては幻まぼろしと頬ほをかすられて、私わたしは此この中ちゅう段だんまで轉ころげ  
落おちた。些ちと大お袈ほ裟げだがね、遠とほくの暗くらい海うみの上うへで、  
稻妻いなづまがして居ゐたよ。其その夜よ、途とちう中ちゅうからえらい降ふり  
で。」

辻町つじまちは夕立ゆふだちを懐おもふ如ごとく、少時しばらく息いきを沈しづめたが、やが  
て、一寸すんぷと語調ごてうをかへて云いつた。

「お米坊よねぼう、そんな、こんな、お母かあさんに聞きいて居ゐ  
たのかね。」

「え、お嫁よめに行いつてから、あと・・・」  
「然さうだらうな、あの氣象きしやうでも、極きまりどころば整ちや  
然んとして居ゐる。嫁入よめいりまへ前の若わかい娘むすめに、餘あまり聞きかせる事こと  
ぢやないから。」

「ー さて、問題もんだいの提灯ちやうちんだ。成程なるほど、其その人ひとに、切き  
籠燈りこのかはりに供そなへると、思おもつたのは尤もつともだ。が、そ  
んな、實じつは、しをらしいとか、心入こころいれ、とかいふ奇き

特なんぢやなかつたよ。懺悔をするがね、實は我ながら、とぼけて居て、ひとりでをかしくらゐるんだよ。月夜に提灯が贅澤なら、眞晝間ぶらで提げたのは、何だらう、餘程半間さ。

といふのがね、先刻お前さんは、連にはぐれた觀光團が、鼻の下を伸ばして、うつかり見物して居る間抜けに附合ふ氣で、黙つてついて居てくれたけれど、來がけに坂下の小路中で、あの提灯屋の前へ、私が茫乎突立つたらう。

場所も方角も、まるで違ふけれども、むかし小學校の時分、學校近所の・・・あすこは大川近の窪地だが、寺があつて、其の門前に、店の暗い提灯屋があつた。髯のある親仁が、紺の筒袖を、斑々の胡粉だらけ。腰衣のやうな幅廣の前掛したのが、泥繪具だらけ、青や、紅や、其のまゝ轉がったら、樂書の獅子になりさうで、牡丹をこつてりと刷毛で彩る。緋を桃色に颯と流して、ぼかす手際が鮮彩です。それから鯉の瀧登り。八橋一面の杜若は、風呂屋へ進上の祝だらう。そんな比羅繪を、のし掛つて描い

て居るのが、嬉しくて、面白くつて、繪具を解き溜めた大摺鉢へ、鞠子の宿ぢやないけれど、柴積汁となつて溶込むやうに・・・学校の歸途には其の軒下へ、いつまでも立つて見て居た事を思出した。時雨も霽も知つて居る。夏は學校が休です。櫻の春、また雪の時なんぞは、その緋牡丹の燃えた事、冴えた事、葉にも苔にも、バツノと惜氣なく金銀の箔を使ふのが、御殿の廊下へ日の射したやうに輝いた。然うした時は、家へ歸る途中の、大川の橋に、綺麗な牡丹が咲いたつけ。

先刻のあの提灯屋は、繪比羅も何にも描いては居ない。番傘の白いのを日向へ並べて居たんだが、つい、その昔を思出して、餘り店を覗いたので、たゞぢや出て来にくくなつたもんだから、觀光團お買上げさ。

――ご紋は――  
――牡丹――

何、描かせては手間がとれる・・・第一實用

むきの氣といつては、聊もなかつたからね。これは、傘でもよかつたよ。パツと擴げて、菊を持つたお米さんに、背後から差掛けて登れば可かつた。」

「どうぞ。……女萬歳の廣告に。」

「仰せのとほり。——いや、串戯はよして。いまの並べた傘の小間隙間へ、柳を透いて日のさすのが、銀の色紙を擴げたやうな處へ、お前さんの其の花について居たらう、蝶が二つ、あの店へ翔込んで、傘の上へ舞つたのが、雪の牡丹へ、ちら／＼と箔が散浮く

其のまゝに見えたと思つた時も——箔——  
すぐ此の寺に墓のある——同町内に、ぐつし  
よりと濡れた姿を僂く引取つた——箔屋——  
にも氣がつかなくなつた。薄情とは言はれまいが、  
世帯の苦勞に、朝夕は、細く刻んでも、日は遠い。  
年月が餘り隔ると、目前の菊日和も、遠い花の霞になつて、夢の朧が消えて行く。

が、あらためて、澄まない氣がする。御母堂の奥

津城を展じたあとで。．．．．．ずっと離れて居るといゝんだがな。近いと、どうも、此の年でも極りが悪い。きつと冷かすぜ、石塔の下から、クツ／＼、カラ／＼と先づ笑ふ。」

「こはい、をぢさん。お母さんだがいゝけれど。．．．．．私がついて居ますから、冷かしはしませんから、よく、お拜みなさいませよね。」

「――（糸塚）さん。」  
「糸塚．．．．．初路さんか。糸塚は姓なのかね。」

「いゝえ、あら、然う．．．．．をぢさんは、ご存じないわね。」

「――糸塚さん、糸巻塚ともいふんですつて。此の谷を一つ隔てた、向うの山の中途に、鬼子母様のお寺があります。」

「あゝ、柘榴寺――眞成寺。」

「一寸ごめんなさい。私も端の方へ、少し休んで。．．．．．いゝえ、構ふもんですか。落葉とい



つても錦のやうで、勿體ないほどですわ。あの柘榴  
の花の散つた中へ、鬼子母神様の雲だといつて、草  
履を脱いで坐つたのも、つい近頃のやうですもの。  
お母さんにつれられて。白い雲、青い雲、紫の雲は  
何様でせう。鬼子母神様は紅い雲のやうに思はれま  
すね。」

墓所は直近いのに、面影を遙かに偲んで、母親を  
想ふか、お米は恍惚して言つた。

――聞くとともに、辻町は、其の壮年を三四年、  
相州逗子に過ぎした時、新婚の渠の妻女の、病厄の  
ために將に絶えなむとした生命を、醫療も且よ。ま  
さしく觀世音の大慈の利驗に生きたことを忘れない。  
南海靈山の岩殿寺、奥の御堂の裏山に、一處咲満ち  
て、春たけなはな白光に、奇しき薫の漲つた紫の葶  
の中に、白い山兔の飛ぶのを視つつ、病中の人を念  
じたのを、此の時まざ／＼と、目前の雲に視て、輝  
く靈巖の臺に對し、さしうつむくまで、心衷に、恭  
禮黙拝したのである。

――お米の横顔さへ、臆たけて、

「栂榴寺、ね、をぢさん、彼處の寺内に、初代元祖、友禪の墓がありませう。一頃は訪ふ人どころか、苔の下に土も枯れ、水も涸いて居たんですが、近年他國の人たちが方々から尋ねて来て、世評が高いもんですから、記念碑が新しく建ちましてね、名所のやうに成りました。それでね、こゝのお寺でも、新規に、初路さんの、矢張り記念碑を建てる事になつたんです。」

「はゝあ、和尚さん、娑婆氣だな、人寄せに、黒枠で・・・と身を投げた人だから、薄彩色水繪具の立石板。」

「黙つて・・・いゝえ、お上人よりか、檀家の有志、縣の勸光會の表向きの仕事なんです。お寺は地所を貸すんです。」

「葬つた土とは別なんだね。」

「えゝ、それで、糸塚、糸巻塚、どつちにしようかつていつてるところ。」

「どつちにしろ、友禪の（染）に對する

（糸）なんだらう。」

「そんな、たゞ思ひつき、趣向ですか、そんなぢやありません。あの方、はんけちの工場へ通つて、縫取をしていらしつてさ、それが原因で、あんな事になつたんですもの。絲も紅絲からですわ。」

「絲も紅絲……はんけちの工場へ通つて、縫取をして、それが原因？……」

「まあ、何にも、ご存じない。」

「怪我にも心中だなどといふ、然ういつちや、しかし濟まないけれども、何にも知らない。おなじ寫眞を並んで取つても、大勢の中だと、いつとなく、生別れ、死別れ、年が経つと、其つ切になる事もあるからね。」 辻町は向直つていつたのである。

「蟹は甲らに似せて穴を掘る……も可訝いかな。おなじ穴の狸……飛んでもない。一升入の瓢は一升だけ、何しろ、當推量も左前だ。誰もお極りの貧のくるしみからだと思つて居たよ。」  
また、事實然うであつた。

「まあ、然うですか、いふのもお可哀相。あの方、

それは、おくらしに賃仕事をなすつたでせう。けれど、もと、千五百石のお邸の女臈さん。」

「おゝ、ざつとお姫様だ。あゝ、惜しい事をした。あの晩一緒に死んで置けば、今頃はうまれかはつて、小いろの一つも持った果報な男に成つたらう。・・・絲も、紅絲は聞いても床しい。」

「それどころぢやありません。其の絲から起つた事です。千五百石の女臈ですが、初路さん、お妾腹だつたんですつて。それでも一粒種、いゝ月日の下に、生れなすつたんですけれど、廢藩以來、ほどなく、お邸は退轉、御兩親も皆あの世。お部屋方の遠縁へ引取られなさいましたのが、いま、お話のありました箔屋なのです。時節がら、箔屋さんも暮しが安易でないために、工場通ひをなさいました。お邸育ちのお慰みから、縮緬細工もお上手だし、お針は利きます。すぐ第一等の女工さんで極上等のものばかり、はんけちと云つて、薄色もありませうが、おもに自絹へ、蝶花を綺麗に刺繡をするんですが、いゝ品は、國産の譽れの一つで、内地より、外國へ高級品で出たんですつて。」

「  
成程。  
」  
なるほど

四

あれ／＼見たか  
あれ見たか

「あれ／＼見たか、あれ見たか、二つ蜻蛉が草の葉に、かやつり草に宿かりて・・・其の唄を、工場で唱ひましたつてさ。唄が初路さんを殺したんです。」

細い、かやつり草を、青く縁へとつて、其の片端、はんけちの雪のやうな地へ赤蜻蛉を二つ。」

お米の二つ折る指がしなつて、内端に襟をおさへたのである。

「一ツづつ、蜻蛉が別ならよかつたんでせうし、外の人の考案で、あの方、たゞ刺繍だけなら、何でもなかつたと言ふんです。どの道、うつくしいのと、仕事の上手なのに、嫉み猜みから起つた事です。何につけ、彼につけ、ゆがみ曲りに難癖をつけないで

は措きません。處を圖案まで、あの方がなさいました。何から思ひつきなすつたんだか。――その赤蜻蛉の刺繍が、大層な評判だし、分けて輸出さきの西洋の氣受けが、それは、凄い勢で、どし／＼注文が來ました處から、外國まで、恥を曝すんだつて、羽をみんな、手足にして、紅いのを縮緬のやうに唄ひ囃して、身肌を見せたど、騒ぐんでせう。」

(巻初に記して一察に供した俗謠には、二三行、

脱落があるらしい、お米が口誦を憚つたからである。)

「いやですわね、をぢさん、蝶々や、蜻蛉は、あれは衣服を着て居るでせうか。」

――人目しのぶと思へども

羽はうすもの隠されぬ――

それも一つならまだしもだけけれど、一つの尾に――

つが續いて、すつと、あの、羽を八つ、靜かに銀絲  
で縫つたんです、寝て居やしません、飛んでゐるん  
ですわね。えゝ、それをですわ、

―― 世間、いなづま目が光る　――

―― 恥を知らぬか、恥ぢないか　―― と皆で  
わあ／＼、さも初路さんが、そんな姿繪を、紅い毛、  
碧い目にまで、露呈に見せて、お寶を儲けたやうに、  
唱ひ立てられて見た日には、内氣な、優しい、上品  
な、着ものの上から觸られても、毒蛇の牙形が膚に  
沁みる・・・雪に咲いた、白玉椿のお人柄、耳  
たぶの赤くなる、もうそれが、碎けるのです、散る  
のです。

遺書にも、あつたさうです。　―― あゝ、恥か  
しいと思つたばかりに　――

「察しられる、思ひやられる。お前さんも聞いて  
居ようか。むかし、正しい武家の女性たちは、拷問  
の筈、火水の責にも、斷じて口を開かない時、唯、  
衣を褌ふ、肌着を剥ぐ、裸體にするといふとともに、  
直ちに罪に落ちたといふんだ。　――　そこへ掛け



ると……」

辻町は、かくも心弱い人のために、西班牙セビラの煙草工場のお轉婆を羨んだ。

同時に、お米の母を思った。お京がもし其の場に處したら、相手の工女の顔に象棋盤の目を切るかばりに、酢ながら心太を打ちまけたらう。

「そこへ掛けると平民の子はね。」

辻町は、うつかりいつた。

「だつて、平民だつて、人の前で。」

「いゝえ。」

「えゝ、どうせ私は平民の子ですから。」 辻町

は、其の乳のわきの、青い若菜を、ふと思つて、覺えず肩を縮めたのである。

「あやまつた。いや、しかし、千五百石の女臈、昔ものがたり以上に、あはれにはかない。而うして清らかだ。」

「中將姫のやうでしたつて、白羽二重の上へ、辻と、あの方、白い指が消えました。露が光るやう

に、針の尖を傳つて、薄い胸から紅い絲が揺れて染まつて、また勝つて、銀の絲がきら／＼と、何枚か、幾つの蜻蛉が、すい／＼と浮いて寫る。――  
（私が傍に見て居ました） つて、鼻ひしやげの其頃の工女が、茄子の古漬のやうな口を開けて、若い年で話すんです。その女だつて、その臭い口で聲を張つて唱つたんだと思ふと、聞いて居て、口惜しい、睨んでやりたいやうですわ。――でも自害をなさいました、後一年ばかり、一時は此の土地で湯屋でも道端でも唄つて、お氣の弱いのをたつとむまでも、初路さんの刺繡を恥かしい事にいひましたとさ。

――あれ／＼見たか、あれ見たか――銀の羽がそのまゝ手足で、二つ蜻蛉が何とかですもの。」「一體また二つの蜻蛉が何故が變だらう。見聞が狭い、知らないんだよ。土地の人は――然ういふ私だつて、近頃まで、つい氣がつかずに居たんだがね。

手紙の次手で知つておいでだらうが、私の住んで居る處と、京橋の築地までは、然うだね、此處から、

ずつと見て、向うの海まではあるだらう。今度、當地へ來がけに、齒が疼んで、馴染の齒科醫へ行つたとお思ひ。その築地は、といふと、用たして、齒科醫は大廻りに赤坂なんだよ。途中、四谷新宿へ突抜けの麹町の大通りから三宅坂、日比谷・・・銀座へ出る・・・歌舞伎座の前を真直に、目的の明石町までと饒舌つてもいゝ加減の間、町充滿、屋根一面、上下、左右、縦も横も、微紅い光る雨に、花吹雪を浮かせたやうに、羽が透き、身が染つて、數限りもない赤蜻蛉の、大流れを漲らして飛ぶのが、行違つたり、正に舞亂れたりするんぢやあない、上へ斜、下へ斜、右へ斜、左へ斜といった形で、おなじ方向を眞北へさして、見當は淺草、千住、それから先は何處までか、幾ど想像にも及びません。

―― 明石町は晝の不知火、隅田川の水の影が映つたよ。

で、急いで明石町から引返して、赤坂の方へ向ふと、また、おなじやうに飛んで居る。群れて行く。齒科醫で、椅子に掛けた。窓の外を、此の時は、幾分か、其の數はまばらに見えたが、それでも、千や

二千ぢやない、二階の窓をすれ／＼の處に向ふ家の  
廂見當、丁ど電信、電話線の高さを飛ぶ。それより、  
高くもない。ずっと低くもない。どれも、おなじく  
らゐな空を通るんだがね、計り知られない其の大群  
は、層を厚く、密度を濃かにしたのぢやなくつて、  
薄く透通る。其の一つ一つの薄い羽のやうにさ。

何の事はない、見た處、東京の低い空を、淡紅一  
面の紗を張つて、銀の霞に包んだやうだ。聳立つた、  
洋館、高い林、森なぞは、さながら、夕日の紅を巻  
いた白浪の上の巖の島と云つた態だ。

つい口へ出た。（蜻蛉が大層飛んで居ますね。）  
齒醫師が（はあ、早朝からですよ。）と言つ  
たがね。其の時は四時過ぎです。

歸途に、赤坂見附で、同じことを、運轉手に云ふ  
と、（今は少くなりました。こんなもんぢやあり  
ません。今朝六時頃、此の見附を、客人で通りまし  
た時は、上下、左右すれ違ふとサワ／＼と音がしま  
す。青空、青山、正面の雪の富士山の雲の下まで裾

野を蔽ふといひます紫雲英のやうに、いつばいです。赤蜻蛉に乗せられて、車が浮いて困つてしまひました。こんな経験は、じめてです。と更めて吃驚したやうに言ふんだね。私も、その日ほど夥しいのは始めてだつたけれど、赤蜻蛉の群の一日都會に漲るのは、秋、おなじ頃、殆ど毎年と云つてもいゝ。子供のうちから大好きなだけけれど、これに氣のついたのは、――うつかりぢやないか――此の八九年以來なんだが、月はかはりません。きつと十月、中の十日から二十日の間、三年つゞいて十七日といふのを、手帳につけて覚えて居ます。季節、天氣といふものは、そんなに模様の變らないものと見えて、いつの年も秋の長雨、しけつゞき、また大あらしのあつた翌朝、からりと、嘘のやうに青空になると、待つてたやうに、しづめたり浮いたり、風に、すら／＼すら／＼と、薄い紅い霧をほぐして通る。

――此の邊は、何うだらう。

「え。」

話にきゝとれて居た所爲ではあるまい、お米の顔

は緋葉の蔭にほんのりして居た。

「……もう晩いでせう、今日は一つも見  
えませんわ。前の月の命日に参詣をしました時、山  
門を出て……あら、このいゝ日和にむら雨  
かと思ひました。赤蜻蛉の羽がまるで銀の雨の降る  
やうに見えたんです。」

「一ツづゝかね。」

「ひとツづゝ？」

「二ツづゝではなかつたかい。」

「さあ、それはどうですか、一寸私氣がつかませ

ん。」

「氣がつくまい、然うだらう。それを言ひたかつ  
たんだ、いまの蜻蛉の群の話は。それがね、残らず、  
二つだよ、比翼なんだよ。其の刺繍の姿と、おなじ  
に、此を見て土地の人は、初路さんを殺したやうに、  
どんな唄を唱ふだらう。」

みだらだの、風儀を亂すの、恥を曝すのといつて、  
何うする氣だらう。浪で洗へますか、火で焼けます  
か、地震だつて壊せやしない。天を蔽ひ地に漲る、

といった處で、颱風があれば消えるだらう。儂いものではあるけれども――あゝ、その儂さを一人で身に受けたのは初路さんだね。」

「えゝ、ですから、ですから、をぢさん、其のお慰めかたノゝ……今では時世がかばりました。供養のために、初路さんの手技を稱め贊へようと、それで、「糸塚」といふ記念の碑を。」

「もう、出来かゝつて居るんです。圖取は新聞にも出て居ました。臺石の上へ、見事な白い石で大きな絲柩を据ゑるんです。刻んだ絲を巻いて、丹で染めるんだつていふんですわ。」

「其處で、「友禪の碑」と、對するののか。しかし、いや、兎に角、悪い事ではない。場所は、位置は。」

「さあ、行つて見ませう。半分うへ出来て居るやうです。門を入つて、直きの場所です。」

辻町は、あの、孟蘭盆の切籠燈に對する、寺の會釋を傳へて、お京が渠に戯れた紅絲を思つて、もの

に手<sup>た</sup>繰<sup>ぐ</sup>られるやうに、  
提<sup>ちやう</sup>灯<sup>ちん</sup>とともにふらりと立<sup>た</sup>つた。



五

「おばけの……蜻蛉？……をぢさ

ん。」

「何、そんなものの居よう筈はない。」

と然も落着いたらしく、聲を沈めた。其の癖、唯  
 た今、思はず、「呀！」といったのは誰だらう。

いま辻町は、蒼然として苔蒸した一基の石碑を片  
 手で抱いて——いや、抱くなどといふのは憚か  
 らう——霜より冷くつても、千五百石の女臈の、  
 石の軀もいふべきものに手を添へて居るのである。  
 たゞし、その上に、沈んだ藤色のお米の羽織が袖を  
 すんなりと墓のなりにかゝつた、が、織だか、地紋  
 だか、影繪のやうに細い柳の葉に、菊らしいのを薄  
 色に染出したのが、白い山土に敷亂れた、枯草の中  
 に咲残つた、一叢の嫁菜の花と、入交ぜに、空を蔽  
 うた雑樹を洩れる日光に、幻の影を籠めた、墓はさ  
 ながら、梢を落ちた、うらがなしい綺麗な錦紗の燈  
 籠の、うつむき伏した風情がある。

こゝは、切立といふほどではないが、巖組みの徑が嶮しく、碎いた薬研の底を上る、涸れた瀧の痕に似て、草土手の小高い處で、累々と墓が並び、傾き、又倒れたのがある。

上り切つた卵塔の一劃、高い處に、裏山の峯を抽いて繁つたのが、例の高燈籠の大榎で、巖を縫つて蟠つた根に寄つて、先祖代々とともに、お米のお母さんが、ばつと目を開きさうに眠つて居る。其處も蔭で、薄暗い。

それ、持參の晝提灯、土の下から嘸ぞ、半間だと罵倒しようが、白く据つて、ばつと包んだ線香の煙が靡いて、裸蠟燭の灯が、静寂な風に、ちら／＼する。

榎を潜つた彼方の崖は、すぐに、大傾斜の窪地になつて、山の裙まで、寺の裏庭を取りまはして一谷一面の卵塔である。

初路の墓は、お京のと相向つて、やゝ斜下、左の

草土手の處にあつた。

見たまへーお米が外套を折疊みにして袖に取つて、背後に立添つた、前踞みに、辻町は手を其の石碑にかけた羽織の、裏の媚かしい中へ、さし入れた。手首に冴えて淡藍が映える。片手には、頑丈な、鏝の出た、木鋏を構へて居る。

此の大剪刀が、もし空の樹の枝へでも引掛つて居たのだと、うつかり手にはしなかつたらう。孟蘭盆の夜が更けて、燈籠が消えた時のやうに、羽織で包んだ初路の墓は、あはれにうつくしく、且つあたりを籠めて、陰々として、鬼氣が籠るのであつたから。

鋏は落ちて居た。これは、寺男の爺やまじりに、三人の日傭取が、ものに驚き、泡を食つて、遁出するのに、投出したものであつた。

其の次第は恚うである。

はじめ二人は、磔から、山門を入ると、廣い山内、鐘樓なし。松を控へた墓地の入口の、鎖さない木戸に近く、八分出来といふ石の塚を視た。臺石に特に

意匠いしやうはない、つい通りとほの巖組いはぐみ一丈飴ちやうあまりの上うへに、詭あつちへ  
の棹わくを置おいた。が、あの、くる／＼と絲いとを廻まはす棒ぼうは  
見みえぬ。くり抜ぬいた跡あとはあるから、此これには何か考案かうあん  
があるらしい。お米よねもそれはまだ知らなかつた。棹わく  
の四よつつの柄えは、其その半面はんめんに對たいしても幸さいはに鼎かなえに似にない。  
鼎かなえに似にると、烹にるも烙やくも、いづれ殲楚かよわい人ひとのため  
に見みる目めも忍しのびないであらう處ところを、恰好あたかもよし、玉たまを捧さぐ  
る白珊瑚しろさんごの滑なめらかなる枝えだに見みえた。

「かへりに、ゆつくり拝見はいけんしよう。」

その母親はやおやの展墓てんぼである。自分じぶんからは急いそがすのをた  
めらつた案内者あんないしやが、

「道みちが悪わるいんですから、氣きをつけてね。」

わあ、わつ、わつ、わつ、わつ、おう、ふうと、鼻呼吸はないき  
を吹ふいた面つらを並ならべ、手てを舉あげ、胸むねを敲たき、拳こぶしを振ふり  
など、なだれを打うち、足あしたゞらを踏ふんで、一時ひとときに四よに  
人ん、摺違すれちがひに木戸口きどくちへ、茶色ちやいろになつて湧わいて出でた。

其その聲こゑも跫音あしおとも、響ひびくと、もろともに、落おちかゝ  
つたばかりである。

不意に打つかりさうなのを、軽く身を抜いて路を避けた、お米の顔に、鼻をまともに突向けた、先頭第一番の爺が、面も、脛も、一縮みの皺の中から、ニンガリと變に笑つたと思ふと、

「出たゞえ、幽霊だあ。」

幽霊。

「おツさん、蛇、蝮？」

お米は「幽霊と聞いたのに——一寸眉を顰めて、蛇、蝮を憂慮つた。」

「那樣なもんぢやねえだア。」

如何にも、那樣なものには怯えまい、面魂、印半纏も交つて、布子のどんつく、半股引、が入亂れ、屈竟な日傭取が、早く、糸塚の前を摺抜けて、松の下に、ごしゃ／＼とかたまつた中から、寺爺やの白い眉の、びく／＼と動くが見えて、

「蜻蛉だあ。」

「幽霊蜻蛉ですだアい。」

と、冬の麥稈帽を被つた、若いのが聲を掛けた。

「蜻蛉なら、幽霊だつて。」

お米は、莞爾して坂上りに、衣紋のやゝ亂れた、

淺黄を雪に透く胸を、身繕ひもせず、そのまま、見返りもしないで木戸を入つた。

巖は鋭い。踏上げる徑は嶮しい。が、お米の雙の爪さきは、白い蝶々に、をぢさんを載せて、高く導く。

「何だい、今のは、あれは。」

「久助つて、寺爺やです。卵塔場で働いて居て、休みのお茶のついでに、私をからかつたんでせう。

子供だと思つて居る。をぢさんがいらつしやるのに、見さかひがない。馬鹿だよ。」

「若いお前さんと、一緒にからかはれたのは嬉し  
いがね、威かすにしても、寺で幽霊をいふ奴がある  
ものか。それも蜻蛉の幽霊。」

「蛇や、蝮でさへなければ、蜥蜴が化けたつて、  
そんなに可恐いもんですか。」

「居るかい。」

「時々。」

「居るだらうな。」

「でも、此の時節。」

「よし、私だつて驚かない。しかし、何だらう、

あゝ、然うか。おはぐるとんぼ、黒とんぼ。また、何とかいつたつけ。漆のやうな眞黒な羽のひら／＼する、織く青い、たしか河原蜻蛉とも云つたと思ふが、あの事ぢやないかね。」

「黒いのは精靈蜻蛉ともいひますわ。幽霊だなんのつて、あの爺い。」

爾時であつた。

「あゝ。」

と、お米が聲を立てると、

「酷いこと、墓を。」

といつた。聲とともに、着た羽織をすつと脱いだ、が、紐を何う解いたか、袖を何う、手の菊へ通したか、それは知らない。花野を颯と靡かした、一筋の風が藤色に通るやうに、早く、其の墓を包んだ。

向う傾けに草へ倒して、ぐる／＼巻といふよりは、がんに搦みに、ひしと荒繩の汚いのを、無残にも。

「初路さんを、——初路さんを。」

これが女臈の碑だつたのである。

「莫蔭にも、蓆にも包まないで、まるで裸にし

て。

と氣色ばみつつ、且つ恥ぢたやうに耳朶を紅くした。

いふまじき事かも知れぬが、辻町の目にも咄嗟に印したのは同じである。臺石から取つて覆へした、持扱ひの荒くれた爪摺れであらう、青々と苔の蒸したのが、處々筆られて、日の隈幽に、石肌の浮いた影を膨らませ、影を文凹ませて、残酷に搦めた、さながら白身の竄れた女を、反接緊縛したに異ならぬ。

推察に難くない。いづれかの都合で、新しい糸塚のために、こゝの位置を動かして持運ばうとしたらしい。

が、心ない仕業を何うする。――お米の羽織に、然うして、墓の姿を隠して好かつた。花やかともいへよう、ものに激した舉動の、此のしつとりした女房の人柄に似ない捷い仕種の思掛けなさを、辻町は怪しまず、然もありさうな事と思つたのは、お京の娘だからであつた。こんな場に出逢つては、き



つとおなじはからひをするに疑ひない。そのかはり、娘と違ひ、落着いたもので、澄まして羽織を脱ぎ、背負揚を棄て、悠然と帯を巖に解いて、あらはな長襦袢ばかりになつて、小袖ぐるみ墓に着せたに違ひない。

何、夏なら、炎天なら何とする？・・・と。  
然ういふ皮肉な讀者には弱る、が、言はねば卑怯らしい、裸體になります、然らずんば、辻町が裸體にされよう。

―― 其の墓へは先づ詣でた　――  
引返して來たのであつた。

辻町の何よりも早くこゝで爲よう心は、立處に繩を切つて棄てる事であつた。瞬時と雖も、人目に曝すに忍びない。行るとなれば手傳はう、お米の手を借りて解きほどこきなどするのにも、二人の目さへ當てかねる。

さしあたり、ことわりもしないで、他の勞業を無

にするといふ遠慮だが、その申譯と、渠等を納得させる手段は、酒と餅で、そんなに煩はしい事はない。手で招いても澁面の皺は伸びよう。また庫裡で心太を突くやうな跳梁權を獲得して居た、檀越夫人の嫡女がこゝに居るのである。

栗柿を剥く、庖丁、小刀、そんなものを借りるのに手間ひまはかゝらない。

大剪刀が、恰も蝙蝠の骨のやうに飛んで居た。

取つて構へて、些と勝手は悪い。が、繩目を見る目に忍びないから、衣を掛けた此のまゝ、留南奇を燻く、繪で見た伏籠を念じながら、もろ手を、づかと袖裏へ。驚破、ほんのりと、暖い。芬と薫つた、石の肌の軟かさ。

思はず、

「呀。」

と聲を立てたのであつた。

「――おばけの蜻蛉、をぢさん。」

「――何そんなものの居よう筈はない。」

胸傍の小さな痣、この青い蘚、そのお米の乳のあ

たりへ鋏はさみが響ひびきさうだつたからである。辻町つじまちは一禮いちれいし、墓はかに向むかつて、屹きつといった。

「お嬢むすめさん、私わたしの仕業しわざが悪わるかつたら、手てを、怪我けがをおさせなさい。」

鋏はさみは爽さわやかな音おとを立てた、ちゝろも聲こゑせず、松風まつかぜを切きつたのである。

「やあ、塗師屋ぬしやま様、——ご新姐しんぞ。」

木戸きどから、寺男てらおとこの皺面しわづらが、墓地ほちしたで口くちをあけて、もう喚わめき、冷めし草履わらじの馴なれたもので、これは礮かうかくたる徑みちは踏ふまない。草土手くさどてを踏ふんで横よこざまに、傍そばへ來きた。

續つづいて日傭取ひようつとりが、おなじく木戸口きどぐちへ、肩かたを組合くみあつて低ひくく出でた。

「ごめんなせえましよ、お客様きやくさま。……ご機嫌きげんよくかうやつてござらつしやる處ところを見ると、間違まちがえごともなかつたの、何なにも、別條べつてうはなかつたゞね。」

「處ところが、おつさん、少々別條せう／＼べつてうがあるんですよ。きみたちの仕事しごとを、一寸無駄ちよつとむだにしたぜ。一杯買いっばいはう、

これです、ぶつ／＼に繩を切拂つた。」

「はい、これは、はあ、いゝ事をさつせえて下さりました。」

「何だか、あべこべのやうな挨拶だな。」

「いんね、全くいゝ事をなさせえました。」

「いゝ事をなさいましたぢやないわ、おいたはし  
いぢやないの、女臈さんがさ。」

「ご新姐、それがね、いや、この、からげ繩、畜  
生。」

其處で、踞んで、毛蟲を踏潰したやうな爪さきへ  
近く、切れて落ちた、むすびめの節立つた荒繩を手  
繰棄てに背後へ匆出しながら、きよろ／＼と樹の空  
を見廻した。

妙なもので、下木戸の目傭取たちも、申合せたや  
うに、揃つて、踞んで、空を見る目が、皆動く。

「いゝ鹽梅に、幽靈蜻蛉、消えたぞかな。」

「一體何だね、それは。」

「もの、それがでござりますよ、お客様、此の、

はい、石塔を動かすにつきましただ。」

「いづれ、あの糸塚とかいふのについての事だろうが、何かね、掘返してお骨でも。」

「いや、それは成りませぬえ。記念碑發起押つぼだての、帽子、靴、洋服、袴、髯の生えた、ご連中さ、其のつもりであつたれど、寺の和尚様、承知さつしやりませぬえだ。ものこれ、三十年経つたところいへ、若い女臍が埋つてるだ。それに、久しい無縁墓だで、ことわりいふ檀家もなしの、立合つてくれる人の見分もないで、と一論判あつた上で、土には觸らねえ事になつたでがす。」

「然うあるべき處だよ。」

「處で、はい、あのさ、石彫の大え絲杵の上へ、がつしりと、立派なお堂を据ゑて戸をあけたてしますだね、その中へ此の……」

お米は着流しのお太鼓で、まことに優に立つて居る。

「おゝ、成佛をさつしやるづら、しをらしい、嫁

菜の花のお羽織きて、霧は紫の雲のやうだ、しな／＼としてや。」

と、苔の生えたやうな手で撫でた。

「あゝ、撫つたい。」

「何でがすい。」

と、何も知らず、久助は墓の羽織を、もう一撫で。

「此の石塔を齋き込むもくろみだ。その堂がもう出来て、切組みも済ましたで、持込んで寸法をきつちり合はず段が、はい、こゝは此の通り足場が悪いと、山門内まで運ぶについて、今日さ、此の運び手間だよ。肩がはりの念入りで、丸太棒で擔ぎ出しますに。――丸太棒めら、丸太棒を押立てて、ごらうじませい、彼處にとぐるを巻いて居ますだ。あのさきへ矢羽根をつけると、掘立普請の齋が出るだね。へい、墓場の入口だ、地獄の門番……はて、飛んでもねえ、肉親のご新姐ござらつしやる。」

と、泥でまぶしさうに、口の端を拳でおさへて、

「――そのさ、擔ぎ出しますに、石の直肌に繩を掛けるで、藁なり蓆なりの、花もの草木を雪圍ひにしますだね、あの骨法でなくば悪かんべいと、

お客様の前だけんど、わし一應はいうたれども、丸  
太棒めら。あに、はい、墓さ苞入に及ぶもんか、手  
間障だ。また誰も見て居ねえで、構ひごとねえだ、  
と吐いての。

和尚様は今日は留守なり、お納所、小僧も、總齋  
に出さした。まづ大事ねえでの。はい、ぐる／＼  
まきのがんじがらみ、や、このしよで、轉がし出し  
た。それさ、其の形でがすよ。わしさ屈腰で、膝は  
だかつて、面を突出す。奴等三方からかぶさりかゝ  
つて、棒を突挿さうとしたと思はつせえまし。何と、  
此の鼻の先、奴等の目の前へ、縄目へ浮いて、羽さ  
弾いて、赤蜻蛉が二つ出た。

たつた今や、それまでといふものは、四人八ツの、  
團栗目に、糠蟲一疋入らなんだに、かけた縄さ下か  
ら潜つて石から湧いて出たは何うしたもんだね。や  
あ／＼、しつ／＼、吹くやら、拂ひますやら、静と  
して赤蜻蛉が動かねえとなると、はい、時代違ひで、  
何の氣もねえ若い徒も、さて此の働きに掛つて見れ  
ば、記念碑系塚の因縁さ、よく聞いて知つてるもん

だで。

ほれ、のろ／＼と此方さ寄つて来るだ。あの、さ  
きへ立つて、丸太棒をついた、それ手拭をだりりと  
首へかけた、遅い男でがす。奴が、女臈の幽霊でね  
えか。出たツと、また髯どのが叫ぶと、蜻蛉がひら  
りと動くと、くわつと二つ、灸のやうな炎が立つ。  
冷い火を汗に浴びると、うら山おろしの風さ眞黒に、  
どつと来た、煙の中を、目が眩んで遁げたでござえ  
ますでの。．．．それでがすもの、ご新姐、お  
客様。

「それぢや、私たち差出た事は、叱言なしに濟む  
んだね。」

「ほつてもねえ、いゝ人扶けて下せえましたよ。  
時に、はい、和尚様歸つて、逢はつせえても、萬々  
沙汰なしに頼みますだ。」

其處へ、丸太棒が、のつそり来た。

「おぢい、もういゝか、大丈夫かよ。」  
「うむ、見せえ、大智識さ五十年の香染の袈裟よ



り利益があつての、その、嫁菜の縮緬の裡で、幽霊はもう消滅だ。」

「幽霊も大袈裟だがよ、悪く、蜻蛉に祟られると、瘡を病むといふから可恐えです。繩をかけたら、また祟つて出やしねえかな。」

と下精髯の布子が、ぶつぶついつた。

「然ういふ口で、何で包むもの持つて来ねえ。糸塚さ、女臈様、素で括つたお祟りだ、これ、敷松葉の數寄屋の庭の牡丹に雪圍ひをすと思へさ。」

「よし、おれが行く。」

と、冬の麥稈帽が出ようとす。

「あゝ、一寸。」

袖を開いて、お米が留めて、

「そのまゝ、その上からお結へなさいな。」

不精髯が――何處か昔の提灯屋に似て居たが、

「このまゝでかね、勿體至極もねえ。」

「かまひませんわ。」

「構はねえたつて。これ、縛るとなると。」

「うつくしいお方が、見てる前で、むぎとなあ。」

「麥藁と、不精鬚が目を見合つて、半ば呟くが如くにいふ。」

「いゝんですよ、構ひませんから。」

この時、丸太棒が鐵のやうに見えた。ぶる／＼と腕に力の漲つた逞しいのが、

「よし、石も婉軟だらう。きれいなご新姐を抱くと思へ。」

といふまゝに、頸の手拭が眞額でピンと反ると、棒をハグと投げ、づかと諸手を墓にかけた。袖の撓ふを胸へ取つた、前抱きにぬつと立ち、腰を張つて土手を下りた。此の方が掛り勝手がいらしい。巖路へ踏みはだかるやうに足を擴げ、タタと總身に動揺を加れて、大きな蟹が龍宮の女房を胸に抱いて逆落しの瀧に乗るやうに、づづづづと下りて行く。

「えらいぞ、權太、怪我をするな。」

と、鬚が小走りに、土手の方から後へ下りる。

「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に。」

と、お米を見返つて、ニヤリとして、麥藁が後に

續いた。

「頓生菩提。……小川へ流すか、燃します

べい。」

さういつて久助が、掻き集めた繩の屑を、一束ねに握つて腰を擡げた時は、三人はもう木戸を出て見えなかつたのである。

「久……爺や、爺やさん、羽織はね。式臺

へはふり込んで置いて可いんですよ。」

この羽織が、黒塗の華頭窓に掛つて居て、其の窓際の机に向つて、お米は細りと坐つて居た。冬の日は釣瓶おとしといふより、梢の熟柿を礫に打つて、もう暮れて、客殿の廣い疊が皆暗い。

こんなにも、清らかなものかと思ふ、お米の頸を差覗くやうにしながら、盆に澁茶は出したが、火を置かぬ火鉢越しに且の机の上の提灯を視た。

（——この、提灯が出ないと、ご迷惑でも話が濟まない——）

信仰しんかうに頒布はんぷする、當山たうざん、本尊ほんぞんのお札ふだを捧さげた三寶さんぼうを傍かたはらに、硯箱すずりばこを控ひかへて、硯すずりの朱しゆの方に筆ふでを染そめつつ、お米よねは提灯ちやうちんに瞳ひとみを凝こらして、眉まゆを描かくやうに染そめて居ゐる。

「――屹きつと思おもひついた、初路はつちさんの糸塚いとづかに手た向むけて歸かへらう。赤蜻蛉あかとんぼ――尾をを銜くはへたのを是非ぜひた頼のむ。塗師屋ぬしやさんの内儀ないぎでも、女學校ぢよがくかうの出でぢやないか。繪ゑといふと面倒めんだうだから圖畫づくわで行ゆくのさ。紅べにを引ひいて、二ふたつならべれば、羽子はねの羽はねでもいゝ。胡蘿蔔にんじんを穢せんに松葉まつばをさしても、形かたちは似にます。指ゆびで挟はさんだ唐たう辛子がらしでも構かまはない。――

と、たそがれの立籠たちこめて一際漆ひとときはつめしのやうな板敷いたじきを、お米よねの白しろい足袋たびの傳つたふ時とき、唆そゝかして口説くどいた。北辰ほくしん妙見菩薩めうけんぼさつを拜をがんで、客殿きやくでんへ退ひく間まであつたが。

水みづをたつぷりと注さして、一寸口ちよつとくちで吸すつて、蒼つほみの唇くちびるをばツつり黒くろく、八枚まいの羽はねを薄墨うすずみで、しかし丹念たんねんにあしらつた。瀬戸せとの水入みづいれが澁しぶのついた鯉こひだつたのは、誂あつひへたやうである。

「出来た、見事々々。お米坊、机に然うやつた處は、赤繪の紫式部だね。」

「知らない、おつかさんにいひつけて叱らせてあげるから。」

「失禮。」

と、茶碗が、また、赤繪だつたので、思はず失言を詫びつつ、準藤原女史に介添してお掛け申す。……羽織を取入れたが、窓あかりに、

「これは、大分うらに青苔がついた。悪いなあ。たゝんで持つか。」

と、持つたのに、それにお米が手を添へて、

「着ますわ。」

「きられるかい、墓のを、其のまゝ。」

「おかはいさうな方のですもの、これ、葱摺です

よ。」

その優しさに、思はず胸がときめいて。

「肩を此方へ。」

「まあ、をぢさん。」

「おつかさんの名代だ、娘に着せるのに仔細な

い。

「はい、……どうぞ。」

くるりと向きかはると、思ひがけず、辻町の胸にヒヤリと髪をつけたのである。

「私、こひしい、おつかさん。」

前刻から――辻町は、演藝、映畫、そんなもの樂屋に縁がある――ほんの少々たけれども、これは筋にして稼げると、潜在悪心の萌したのが、この時、色も、慾も何にもない、しみ／＼と、いとしくて涙ぐんだ。

「へい。お待遠でござりました。」

片手に蠟燭を、ちら／＼、片手に少しばかり火を入れた十能を持つて、婆さんが庫裏から出た。

「糸塚さんへ置いて行きます、あとで氣をつけて下さいませよ、烏が火を銜へるといひますから。」

お米も、式臺へもうかゝつた。

「へい、もう、刻限で、危氣はござりませぬえ、嘴太鳥も、嘴細鳥も、千羽ヶ淵の森へ行んで寝ました。」

大城下は、目の下に、町の燈は、柳にとまれ、川に流るゝ。磴を下へ、谷の暗いやうに下りた。場末の五燈はまだ來ない。

あきなひ歸りの豆腐屋が、ぶつかるやうに、八たと留つた時、

「あれ、蜻蛉が。」

お米が膝をついて、手を合せた。

あの墓石を寄せかけた、塚の絲柵の柄にかけて下山した、提灯が、山門へ出て、すこしづゝ高くなり、裏山の風一通り、赤蜻蛉が静と動いて、女の影が……二人見えた。

【完】